

松本清張の『黒地の絵』と 占領期の日本人のアフリカ系アメリカ兵観

Deanna T. Nardy

アメリカによる軍事占領下において、日本人が黒人兵を白人兵とは別の存在として見ていたことは確かである。それは例えば、白人兵は「米兵」あるいは「アメリカ兵」と呼ばれていたのに対して、黒人兵は「黒人兵」や「黒ん坊」と呼ばれ、国籍ではなく、人種という視点から呼称が区別されていたことから明らかである¹。当論文では、人種パラダイムがどのように日本人の占領軍被害に対する把握に影響を及ぼしたのかについて、松本清張の短編小説『黒地の絵』（1958年）に焦点を当てながら考察を試みたい。まずこの作品でアフリカ系アメリカ兵は当時の人種差別的言述をもとに描写されながらも、一方で同じ人種差別的言述の犠牲者としても認識されていたことを分析する。それは、当時の日本人がすでに持っていた黒人観と、実際に日本人が目にしたアメリカ軍による黒人兵の扱われ方との乖離の結果によるものである。朝鮮戦争の歴史的事実と物語的な構成要素（とりわけ文学の分野に長い伝統をもつ人種的な表現）を並べて分析することによって、その乖離を浮かび上がらせたい。一方で、この双方の「相容れなさ」のみを強調することは、松本清張が描く小倉黒人兵脱走事件に関する説明としては不十分であることを指摘しておきたい。その点を実証していく上で、竹沢泰子およびバルバラ・J・フィールズとカレン・E・フィールズの人種概念に寄り添いながら、『黒地の絵』における黒人兵の描写を人種パラダイムを通じてのみ解明することの問題点を論じていく。テキスト分析を通して、事件の背景にあり得た重要なエレメントを俎上に載せることで、人種というイデオロギーそのものを前景化することがこの論文の目的である。

松本は戦後日本の最も多作な作家の一人であり、福岡県小倉市（現北九州市）に1909年に生まれた。慎ましやかな境遇で両親が飲食店を経営する中、尋常小学校高等科を卒業した。14歳をむかえ、十一円の月給で川北電気株式会社の給仕となったが、4年後に不況により同社が倒産し、暫くの間街頭で餅を売っていたという。この間、読書人であった松本は、芥川龍之介、岸田国土、山本有三、エドガー・アラン・ポーといった春陽堂文庫や新潮社の出版物を愛読した。20歳の頃、石版印刷の見習い職人となったが、『文芸戦線』や『戦旗』などのプロレタリア文学誌を読んでいたため12日間小倉署に留置された。その後、福岡市島井オフセット印刷所に入り、1936年に結婚、翌年朝日新聞が西部本社を開設したのを機に、広告版下を書き始める。1938年に長女が生まれ、生活がやや安定したのは、朝日新聞西部本社広告部の嘱託となった1939年からであった。1940年と1942年に長男と

¹ Yasuhiro Okada, "Race, Masculinity, and Military Occupation: African American Soldiers' Encounters with the Japanese at Camp Gifu, 1947-1951," *The Journal of African American History* 96 (2011): 186.

次男も生まれ、同時期に朝日新聞の正社員となる。しかし1942年12月に教育召集され、この時は3か月で解除されるものの、1943年6月に再び召集される。衛生兵としてニューギニアへの派遣される予定であったが、渡航船がないため朝鮮京城に長く残留し、敗戦まで朝鮮半島を転々とした。敗戦後三男が生まれ、朝日新聞に復職する。1950年『週刊朝日』の懸賞小説に応募した「西郷札」が三等に入選し、1952年「或る『小倉日記』伝」が翌年の芥川賞を受賞するにあたり、1956年朝日を退社、文筆専業となった。短編小説を書き続け、主に連載小説の形で1958年に5つの小説を執筆、翌年さらに7つの小説を連載し始める。こうして小説を次から次へと多産した松本は1960年に日本の作家の中で高額所得者となった²。

『黒地の絵』は『新潮』の1958年3月号と4月号に三島由紀夫、伊藤整、尾崎一雄等の作家の作品と並んで連載された。『黒地の絵』を書く背景に関して、松本は次のように述べている。

『黒地の絵』は、朝鮮戦争中に実際に九州小倉に起こった事件で、この騒動のとき、私もその暴動地域のなかに住んでいた。しかし、黒人のこの暴動は、関係のないところでは全然気がつかれずに、私も翌朝になって事実を聞いたような次第だった。新聞には小倉キャンプの司令官が遺憾の意を表す意味の抽象的で簡単な発表をのせただけで、事件の詳しい報道は一切許されなかった。また、この短かい公式発表も北九州地区の新聞に載っただけで、全国的には報(し)られなかった。これを書くため小倉に戻って、当時の人たちの話を聞いたが、被害の届け出が少なかったのと、占領下だったために、現在でもよく分っていない³。

『松本清張全集 37 装飾評伝』における「解説」で、中野好夫はこの「よく分っていない」ところに反応する形で、「わたしなどにでもわかったところによると、どうやらこの作品、かなりの部分は想像の所産らしい」と述べている⁴。それにもかかわらず、「なんとという見事な作品化であるか」と称賛し、作品発表直後の感銘は再読しても「少しも変わりなかった」と記している。それに対して平野謙は、『黒地の絵』における現実題材の文学的処理を未熟だと批判し、「このショッキングな作品をくりかえし読む気にならない」とまで非難する⁵。これらの解説者によって提示された批評軸である「文学的処理」と「想像の所産」を本論文でも問題化していきたい。

『黒地の絵』の分析に入る前に、アメリカ極東軍司令部の第二十四歩兵師団の経緯を見ておこう。公式のアメリカ軍事史によれば、黒人の中には、アメリカ独立戦争や南北戦争に参戦した者もいたが、それはあくまでも非公式であって、彼らが公式にアメリカ兵として軍隊の一員となったのは南北戦争の後からだという⁶。黒人兵が最初に配属されたのは第

² 「年譜」『新潮社日本文学 50 松本清張集』(東京:新潮社, 1970年); “Seicho Matsumoto,” In *Contemporary Authors Online*. Detroit, MI: Gale, 2017. *Gale In Context: Biography*.

³ 松本清張「あとがき」『松本清張全集 37 装飾評伝』(東京:文藝春秋, 1973年), 551.

⁴ 中野好夫「解説」『松本清張全集 37 装飾評伝』(東京:文藝春秋, 1973年), 561.

⁵ 平野謙「解説」『黒地の絵 傑作短編集 2』東京:新潮文庫, 1965年.

⁶ William T. Bowers, William M. Hammond, and George L. MacGarrigle, *Black Soldier, White Army: The 24th Infantry Regiment in Korea* (Washington D.C.: United States Army Center of Military History, 1996), 5.

三十八および第四十一歩兵師団だが、1869年にこの二つの師団が統合されて第二十四歩兵師団となり、朝鮮戦争の半ばまで存在していた。歴史的に言えば、黒人兵たちは軍務に対して一般的に勤勉であり、白人兵と比べて脱走率も低かったというが、アメリカ軍は黒人の軍事参加を兵士全体の1割に制限していた⁷。当時の人種論によると、黒色人種は実戦に不向きであり、特にフィリピンのような有色人種が住む戦場では有色人種に共鳴してしまうため一層適さないと考えられていた⁸。それに加え、アメリカ軍は黒人専用の兵舎・病院・慰安施設などを設けて徹底的に黒人兵を白人兵から隔離したため、経費等の面からも上述の制限を実施していた⁹。入軍を許可された黒人らについても、通常は白人兵並みの昇格はありえず、その上コックや運搬などの召使いのような役割をあてがわれることが多かったという¹⁰。

第二次世界大戦に従軍した黒人兵も、ジム・クロウ法の下で困窮した生活を送っていた。例えば、1946年に帰国したあるアフリカ系アメリカ人は、故郷のミシシッピ州に着いて軍の車から降りた直後に白人に叩きのめされ、両眼の視力を失ってしまったという事件があった¹¹。そのような中、戦後日本の岐阜県で第二十四歩兵師団に転機が訪れることとなる。岐阜で軍務に付いていた黒人兵は日本人女性との交渉を通じて自分自身の黒人性と男性性を再確認できる安息の地を発見したのである。軍事占領とジェンダーと人種の交錯点に関して、ヤスヒロ・オカダは「日本にいたアフリカ系アメリカ人兵は、他のGIと同じように、アメリカ占領軍の一員として、一般的に日本人の女性、特に売春婦に対する性的かつ家父長制的な特権を要求することによって『軍隊化された』意味での男性性を主張した」と述べている¹²。オカダはさらに、オリエンタリズムの観点から極めて女らしく、極めて性的で男性の意のままになる日本人女性に対し、黒人兵は征服者としての自分の地位にふさわしい尊敬を求めた、と分析している。当時の黒人兵は実戦に投入されることが少なかったため、第二十四歩兵師団の兵士たちはR・R（リリーフ・レクリエーション）を楽しむ余裕が比較的あったという。このことは彼らの相対的に高い性病罹患率からもうかがわれる¹³。

日本人にとって占領期は、黒人と日常的に接する歴史上初めての機会であった。アフリカ分割・奴隷貿易・植民地主義の影響を受けた西洋の人種論では、黒色人種は文明から一番遠い人種とされ、その人種観は福沢諭吉ら明治の知識人たちにも受け入れられ、また第二次世界大戦後の占領期日本においても珍しくない考え方であった。例えば、黒人は尻尾を持っているという話が蔓延していたことにより、この噂を否定するために、ある黒人兵

⁷ Bowers, Hammond, and MacGarrigle, *Black Soldier, White Army*, 6-7, 19.

⁸ Bowers, Hammond, and MacGarrigle, *Black Soldier, White Army*, 12.

⁹ *Ibid.*, 19.

¹⁰ *Ibid.*, 6-8.

¹¹ *Ibid.*, 36-7.

¹² Yasuhiro Okada, “‘Cold War Black Orientalism’: Race, Gender, and African American Representations of Japanese Women during the Early 1950s,” *The Journal of American and Canadian Studies* 27 (2009): 51; 原文では、“African American soldiers in Japan, like other American GIs, asserted the “militarized” sense of masculinity in their claim on sexual and patriarchal privileges vis-à-vis Japanese women in general, and sex workers in particular, as members of the U.S. occupation forces”となっている。

¹³ Bowers, Hammond, and MacGarrigle, *Black Soldier, White Army*, 35-6, 52-4.

がズボンを脱いで尻尾のないお尻を見せるということまであった¹⁴。また、黒人兵が近くに駐留することが分かった時、ある日本人が母に「屋根裏に身を隠してくれ。やってくる黒ん坊に女は犯されるから」と言ったという話もある¹⁵。ちなみに、黒人が強姦魔だという人種差別的な神話は、アメリカが奴隷制度を廃止した時まで遡る。また日本におけるこの神話の広範にわたる広まり方は、日本政府によって米軍兵士のために売春婦として募集された日本人女性にまで及んでいた。最初、黒人兵専用の売春婦が求められていることに怖気づいた女性たちは、後に、白人兵より黒人兵のほうが彼女らを親切に扱うことに驚いたという¹⁶。また子供たちは、子供らしい好奇心で、黒人兵を「チョコレート・ソルジャー」と呼び、舐めた指で黒人兵の黒い肌をこすってから「ソルジャー、ワイ・ユー・ノー・ワシヤワシヤ? (兵隊さん、なんで洗わないの?) 」と聞いた¹⁷。概して言えば、日本人が黒人兵に対して同情を感じたかどうかはさておき、アメリカ軍が行っていた人種隔離は、日本人に、アメリカは白人の国であり、黒人はその他者であるという認識を強く連想させたに違いない。

朝鮮戦争の戦況が悪化していたにもかかわらず、多くのアフリカ系アメリカ兵は自分たちが戦場に送り込まれるとは思っていなかった。第二十四歩兵師団では、武器や装備が老朽化し、部品も不足し、多くの戦車が使えない状態にあった。さらに、岐阜に駐留していたこの師団の下士官・将校・兵士の数は、頻繁に大きく変更された。こうしたさまざまな理由から、第二十四歩兵師団は軍事訓練をほとんど行っていなかった。だが、朝鮮戦争への派遣命令が下され、1950年7月11日と12日に師団は小倉の城野兵営に到着し、翌13日までに師団全体が韓国の釜山に派遣されることになっていた。そのわずか二日の間に、『黒地の絵』のテーマとなる小倉黒人米兵集団脱走事件が起こったのである。

小倉について少し説明しよう。小倉は関門海峡へと向かう港町で、当時の人口は20万人にすぎなかったが、朝鮮半島に近く戦略的に重要な場所であった。第二次世界大戦の間は、旧帝国軍に利用されたが、占領期には演習場として米軍に利用されていた。テッサ・モーリス＝スズキによれば、東京にとって朝鮮戦争は経済的な奇跡として考えられたのに対して、佐世保・小倉・門司では、「近所の農家から没収された土地にタールとコンクリート、兵営と格納庫という風景」が、戦争の傷跡を残した、という¹⁸。この事と、韓国からの移民と難民がいたことが小さな小倉において「社会に圧倒的な衝撃を与えた」¹⁹。これらを背景にして、1950年7月11日の夜、前線に派遣される黒人兵たちが城野兵営から脱走し暴動を起こしたのである。そして、この小倉は『黒地の絵』の作者松本清張の出身地であったことを明記しておきたい。

小倉黒人兵脱走事件の詳細については今でも不明な点が多い。GHQの検閲法により、こ

¹⁴ Okada, "Race, Masculinity, and Military Occupation," 184.

¹⁵ *Ibid.*, 187.

¹⁶ John W. Dower, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II* (New York: W.W. Norton & Co, 1999), 130.

¹⁷ Bowers, Hammond, and MacGarrigle, *Black Soldier, White Army*, 42.

¹⁸ Tessa Morris-Suzuki, "Lavish are the Dead: Re-envisioning Japan's Korean War," *The Asia-Pacific Journal* 11 (2013): 12.

¹⁹ *Ibid.*, 13.

の事件はあまり取材されなかったため世間に知られなかった²⁰。ある准将は、その夜に黒人兵数名が城野兵営から脱走し、「町を徘徊して、酔っ払ったり、けんかをしたり、市民をぶちのめしたり、レイプしようとしたりした、といった騒動を起こした」と証言している²¹。また間違いなく少なくとも一部は武装していた。日本の警察は数人の日本女性がレイプされただけでなく、日本人が一人殺害されたと記録しているが、アメリカ憲兵はそれを否定して、殺された人はおろか怪我人さえいなかったという調査結果を発表した²²。しかし本論では、これらの事実と虚構を判別するのではなく、松本清張が『黒地の絵』においてどのように黒人兵を見つめていたか、に焦点を絞って分析していきたい。

『黒地の絵』はいくつかの朝鮮戦争に関する取材から始まる。「ワシントン特電二十八日発 AP」、「韓国基地十一日発 UP」、「総司令部十二日発表」などの様々な場所から、1950年6月28日から翌月24日まで米軍の朝鮮半島における苦戦が報告という形で記述されている。だがこれらの軍事的事実の報告から突如、小倉でよく知られた祇園祭における太鼓の音の描写へと場面が転換される。この短編小説の語り手は、もしこの太鼓が鳴っていなければ、または駐留していた米兵が「真黒い皮膚を持っていた」人間でなかったら、この事件は起こらなかっただろうと強いトーンで表示している。しかし太鼓が主流の祇園祭は小倉の住民にとって年に一度の待ち遠しい祭りであったこともあり、MP司令官に太鼓の使用をやめるように要請された際も、市当局はそれを受け入れなかった。その後、次のような伏線が挿入される。「彼（司令官）はそのとき危惧の理由は伝えなかった——ことは、後でわかったのだ」²³。また、「不運は、この部隊が黒い人間だったことであり、その寝泊まりのはじまった日が、祭の太鼓が全市に鳴っている日に一致したことであった」という記述をみると、『黒地の絵』において、太鼓が黒人に対して象徴的な力を持っていることがわかるだろう。

ここでいう「象徴的な力」とはどのような力なのだろうか。それは、アフリカ人の本質的な野蛮性を黒い体から引き出させる恐ろしい力、を示している。7月11日の真っ暗な夜はアフリカの密林を思い出させ、その上太鼓の「音は、深い森の奥から打ち鳴らす未開人の祭典舞踊の太鼓に似かよっていた」のである²⁴。またそれは、「彼らの先祖の遠い血」を掻き立て、「黒人の陶酔的な舞踊本能」を湧き上がらせるのである²⁵。黒い体の中には原始的な旋律があり、その旋律は狩猟人の血に繋がっている。アメリカ人か否かにかかわらず、黒い体を持つ人間は完全に未開の過去から離れることはできないのである。

もともと、アフリカ奥地で鳴らす未開人の太鼓には、儀式的の祈りがある。彼らの先祖がアメリカ植民地開拓の労働力として連れてこられたとき、白人から教えられ

²⁰ 藤目ゆき「第2章 占領軍の犯罪—交通犯罪・暴行・傷害・殺人事件」特殊講義，占領軍被害の研究，京都大学，2017年6月13日，7。

²¹ Bowers, Hammond, and MacGarrigle, *Black Soldier, White Army*, 80. 原文では、“all over town causing disorders, such as being drunk, fighting, beating up civilians, and attempting rape”となっている。

²² *Ibid.*

²³ 松本清張「黒地の絵」1958年、『朝鮮戦争：コレクション戦争と文学 第1巻』浅田次郎等編，（東京：集英社，2012年），310。

²⁴ 松本「黒地の絵」，311。

²⁵ 松本「黒地の絵」，312。

た神の恵みに感激し、奴隷の束縛された生活のうちに光明を見いだして創造した
黒人 霊歌にも、アフリカ原始音楽のリズムが、神とは別な、呪術的な祈りのリ
ズムが流れて潜んでいる²⁶。

『黒地の絵』の作者の解釈によれば、こうした「呪術的な祈りのリズム」に酔い惑わされ、黒人兵は小倉の市民に対して暴動を起こしたのである。だが興味深いのは、このような人種的パラダイムに沿う描写の直前に、アフリカ系兵士の実際的な立場が次のように示されていることである。

黒人部隊が到着した日は十日であった。彼らは岐阜から南下した部隊で、数日後には北鮮共産軍と対戦するため朝鮮に送られる運命にあった。彼らは暗い運命を予期して、絶望に戦慄していたということはたぶん想像できるのだ。北鮮軍は米軍が阻止できぬほどの大部隊の人海で南下をつづけつつあった。大田を放棄し、光州を退却し、西南部からも圧迫をうけ、米軍は釜山の北方地区に扇のように追いこまれていた。そこにこの黒人部隊が投入される予定だったのだ。戦地に出動するまで五日と余裕がなかったに違いない。そのことは彼らが一番よく知っていた。彼らが共産軍の海の中に砂のように投入してゆく運命であることも²⁷。

『黒地の絵』において、アフリカにしようがアメリカにしようが、黒人を一つのグループとしてしか見られない人種パラダイムが、この部隊の独特な事情を把握する軍事歴史的な見方と相まって対照的な構図を浮かび上がらせるのである。

ここから話は、前野留吉と妻芳子の家で起こった事件へとさらに発展していく。夜中に六人の黒人兵が前野家に乱入し、順番に芳子をレイプする。「いつもの疎らな、白い顔をした兵士の陽気な《外出》ではむろんなかった²⁸」人種パラダイムの一片を覗かせながら、ヨーロッパやアメリカの白人優越主義者から何百年にも渡り使われてきた黒人に対する人種差別的な言葉によって場面全体が描写されている。例えば、黒人の「厚い唇」、「影のように暗かった」皮膚、犬に喩えられた声、「焦げたように縮れた」髪、「動物的な臭い」などである。黒人兵の体がサイや猿などの動物に喩えられているだけでなく、皮膚はなめし革とさえ呼ばれている。顔貌にかぎらず、留吉は彼等に茶碗を持っていく仕業を「動物に餌をやって早く追い立てる算段²⁹」と喩えているように、黒人兵に対する行為さえも非人間的な視点が据えられている。「黒人」という言葉自体から肌の色が黒いことが分かるにもかかわらず、この場面を通して語り手は繰り返し兵士たちの肌の色に固執する。例えば、「鼻も頬も顎も真黒」、「黒い指」、「猿のような黒い指」、「巨大な六つの黒い山塊」、「黒光りのする盛りあがった皮膚」、「黒い、しまりのない、まるい顔」、「真黒く盛り上がった肉」などの描写から理解できるように、肌の黒さはこの緊迫した場面における恐怖心を促す要因として読者に提示されている。

²⁶ 松本「黒地の絵」, 315.

²⁷ 松本「黒地の絵」, 311

²⁸ 松本「黒地の絵」, 313.

²⁹ 松本「黒地の絵」, 321.

ここで特筆すべきは、六人の黒人の中で一人だけが動物のように描写がされていないという点であり、それは高い鼻と真っ黒ではない肌の色を持っているだけで「美男」とされたハーフの男である。このハーフの男だけは、留吉に「弱々しい目つき」³⁰をした、といったようにやや人間的に記述されている。言い換えると、この兵士の中の何割かの白人が彼を人間化したということであり、それは『黒地の絵』という作品の根底にある「黒人性が人間を非人間化する」というロジックを明らかにしている。また、芳子がレイプされた数時間後に MP が脱走した兵士を狩り出す場面においては、黒人に対する固定化された別の表現も見えてくる。黒人兵数名は逃げようとして周囲の山中に身を隠したが、祭が終わって太鼓の音が止むと、我に返ったように姿を現すのだ。欧米人が好んだ単純で幼稚な黒人というステレオタイプとしての表現であり、「彼らは酒瓶やビール瓶をさげ、足をもつらせて歩いていた。疲労した白い目は哀願に光り、幼児のように無抵抗だった」と書かれている³¹。

これまでの分析を考え合わせると、『黒地の絵』にはヨーロッパの植民地時代からの人種パラダイムに沿うかたちで黒人が表象されている一方、松本の見解の中には、当時、小倉の住人が身近に接していた朝鮮戦争の実情をくみ取った上での黒人表象もあったという点は見逃せない。従来の人種パラダイムによる黒人表象では、黒い体の中に潜んだ野蛮性を引き出す太鼓の力の例は、日本では他の作品にも数多く見られる。ここでいくつか例を挙げるならば、初めてアフリカで撮影された娯楽映画『トレーダーホーン』(1930年) や山川惣治の傑作『少年ケニヤ』(1951年) の中の、太鼓に刺激され狂いだす黒人を描いた場面などが想起される。大江健三郎の『飼育』(1958年) に登場する黒人兵においても、飼いなされた動物の中にも野性が潜み、再び現れる恐れがあるという点で、作中の黒人兵と通底している。

『黒地の絵』の小倉の留吉の話に戻そう。芳子と離婚せざるを得なかった留吉は、朝鮮で戦死したアメリカ兵の屍を運搬する仕事を請け負うことになる。ある日、死体識別の任務を遂行していた歯科医は留吉に話しかけ、日本人の労働組合が MP にいじめられていることを語り出す。

「白人は有色人種を軽蔑しているからね。日本人が兎のように畏にかかったのを見て口笛を鳴らして喜んでいるだろう。司令官に持っていってもだめだな。ストぐらいでは驚きはしない。日本人はばかにしているからね」と、歯科医はつづけた。

「おれも日本人の歯医者というだけで給料に差別をつけられている。安いとは云わんがね。しかし、オーストラリア人だってハンガリー人だって、米国に市民権を持っているというだけで法外な高い給金をとっている。技術はおれの方が上だと思ってるがね。国籍が違うというよりも、有色人種の蔑視だ」。³²

だがその直後、そのような日本人が受けている差別の話聞き流すかのように、留吉は白人兵より黒人兵の死体のほうが多いということに固執する。アメリカ軍が敗北して撤退

³⁰ 松本「黒地の絵」, 327.

³¹ 松本「黒地の絵」, 341.

³² 松本「黒地の絵」, 361.

する際、進撃を続ける北朝鮮軍と後退する白人兵との間で黒人兵を楯のように使うことで白人兵の戦死者を減らそうとしていたのだと思い、留吉は歯科医と以下のような会話をする。

「黒人兵はそうされることを知っていたのでしょうか？」

少し時間がたったので、歯科医は質問の意味の念を押した。

「つまり、自分たちがその位置に立たされるということをか？」

「殺されることをです」

留吉の云い方が、激越な方に訂正されたので、歯科医は何となく不機嫌な顔になり、わざと前言と矛盾する曖昧さで答えた。

「不運だということしか考えまいね。白人だって死んでいるんだから」

「しかし」

と、労働者[留吉]は強硬だった。「殺されるとは思っていたでしょう。負け戦の最中に朝鮮に渡ったのですからね…黒ん坊もかわいそうだな」³³。

この場面での留吉の率直な言葉は読者にある種の哀感を与え、今までとは別の視点から黒人兵を捉えている。そして、留吉は次のように感じるのだ。「黒ん坊もかわいそうだな。かわいそうだが——」妻がレイプされたことは決して許せない。

やがて留吉は、ずっとそれを探してきたかのように、妻を最初にレイプした黒人の死体を発見し、その屍に忘れもしない入れ墨を見つけたのである。その入れ墨—黒地の絵—は留吉が見舞われたトラウマの象徴である。と同時に、その加害者である黒人が受けていたトラウマの象徴でもあったのだ。歯科医の言葉の中にも、「そうだ、あの黒人兵は生きて本国に還ることを計算しなかったのかもしれない」とある。それが黒人兵に「道化絵」（ちなみに、それはアメリカの象徴とされる鷲の絵であった）を肌に彫らせたのである³⁴。それは、ステレオタイプとしての黒人の姿ではない。白人から人種差別を受け、勝てるはずのない戦線に送り込まれることを恐れて日本人女性をレイプした兵士の姿であり、ここに『黒地の絵』における黒人の異なる表象が出現する。まず人種差別的な言葉を多用して黒人を描写することで、松本は黒人をステレオタイプへと還元する。それと同時に、白人による黒人差別や朝鮮戦争の戦況という歴史的な文脈を盛り込むことによって、黒人を人間として描写する視点もそなえている。このことから、当時の一部の日本人において共有されていた多面的で複雑な黒人観をうかがい知ることができる。歴史上はじめて日常的に黒人と接した彼等にとって、占領期はそれまで持っていた人種観を考え直すきっかけとなっていた可能性もあったのではないだろうか。

『黒地の絵』における黒人への相違する二つの視点を踏まえながら、なぜこの相容れない双方の黒人観がいつまでも存続し続けるのかをこれから考察していきたい。一言でいうと、それは「人種」という言葉のせいだと考えられる。つまり、人種パラダイムは、「説明としての機能」を振りかざし絶えず更新され続けるが、実際は何も説明していないのである。何故なら人種パラダイムは「白人」・「黒人」といった分類が先天的な範疇^{カテゴリー}として

³³ 松本「黒地の絵」, 362-3.

³⁴ 松本「黒地の絵」, 366-7.

成立しうるという前提を決め込んでいるからである。言いかえれば、「人種」という概念は自らの生成に関する歴史的な背景を消すことにより、自然な範疇として構成され、成立しているのである³⁵。こうした理論的な虚偽を批判的に分析するために、まず社会人類学者竹沢泰子の研究を取り上げてみたい。竹沢によると、人種を三つの位相として解釈すれば、人種概念の社会における「説明機能」とその役割がどのように作用しているのかをうかがい知ることができる。その三つの位相とは以下の通りである。

『小文字の race』とは、近代化や欧米からの人種分類論の受容などによる影響とは無関係に、それぞれのローカル社会において右のように定義した特性がみられる人種であり、『大文字の Race』とは、世界中の人々のマッピングと分類を意識して構築された科学的概念として流通する人種、また『抵抗の人種 (RR) ((Race as Resistance))』とは、マイノリティ当事者らが、人種主義に抵抗するために、重層的アイデンティティのなかで人種アイデンティティを動員することにより成長・強化される人種である³⁶。

一般的に「人種」と言えば竹沢の大文字の Race を指す。これは欧米の帝国主義時代とともに構築されたものであり、『黒地の絵』の中にも機能する概念である。言い換えれば、先天的に「白人」・「黒人」と、日本人を含む「有色人種」があり、その各々の人種は特定な地理学的な地域に属し、特定な性格を持つという「信念」（まるで宗教のように信じ込んでしまうこと）を示す。しかし、この欧米に従った人種パラダイムは、ある者が特定の人種の一員であるというレッテルがどのように貼られたのかを説明せずに、むしろその過程を隠してしまうのであり、それが大文字の Race へといたるのである。従って竹沢が分析の焦点に置くのはあくまでもより説得力のある小文字の race なのである。小文字の race の「特性」を以下に引用する。

第一に、人種的資質とされるもの（可視的および非可視的身体要素、気質、能力など）が、系譜的に世代から世代へと身体を媒介に「遺伝する」もの、出自によって決定され、環境や外的要因では「(容易に) 変えることができない」ものだと信じられていること。

第二に、自己・他者認識の境界を引く主体が他者集団に対して排他性を示す傾向が強く、とくに古典的な人種概念においては集団間に明白な序列階梯が想定されること。

第三に、その排他性や序列階梯が政治的・経済的あるいは社会的制度や資源と結びついて発露するため…組織的な差異化であり利害と関係しやすいこと³⁷。

「第一」の特性に注目すると、『黒地の絵』に関する点が見えてくる。アフリカ系の人間がどのような環境下で育てられても「身体を媒介に『遺伝』する」とされている、松本

³⁵ 文化人類学 Clifford Geertz は *The Interpretation of Cultures* (New York: Basic Books Inc, 1973)の中でステレオタイプについて同様の議論を展開している。

³⁶ 竹沢泰子 編『人種の表象と社会的リアリティ』(東京:岩波書店, 2009年), 6-7。

³⁷ 同上, 6。

が書く「呪術的なリズム」は一つの例である。それでも、「第二」と「第三」から判読できるように、そうした「人種的資質とされるもの」は先天的かつ自然なものではなく、歴史的な背景に据えられた、社会的・経済的・政治的な面を通して支配されている。支配されているグループを他者化するための戦略として機能しているのである。言い換えれば、人種は結果であり、原因ではない。竹沢が「人種主義がジェンダー差別とともに根強い差別として現れやすい理由は、そこでの差異の『自然化』にある。すなわち、『人種』の差異が自然化されることによって、社会的不平等も人間や社会の手の及ばぬ自然の摂理へと還元される。差異を自然なるものに還元する表象は、支配や周縁化を正当化するために、差異の永続性を確保する表象の戦略的なものである」と主張している。先に引用した留吉と歯科医との会話からも理解できるように、松本も社会的不平等やアフリカ系アメリカ人と日本人の周縁化に注目している。その結果、『黒地の絵』において Race という概念が機能する上に、race という過程も指摘されうることは否定できないことなのである。こうした「人種」を自然な範疇として扱う視点と、「人種」を歴史的・政治的・経済的な他者化、つまり過程として把握する視点を履き違えることが『黒地の絵』における黒人表象の重層性の原因であると言える。

竹沢の言葉を借りると、大文字の Race（「黒人」などの先天的に存在するとされるもの）と小文字の race（様々な社会的・政治的なメカニズムで周縁化されたグループが他者とされ、その差異が自然化したこと）が入り交っていることから、先に示した二つの黒人表象の相容れなさが生じていることも理解できる。『黒地の絵』において、小倉脱走事件は、脱走した兵士が黒人であることに起因すると言いながらも、それとは裏腹にその脱走した兵士が差別されながら、勝てるわけのない戦争の最中に巻き込まれ、絶望の状況で乱暴と恐怖に襲われたことにも起因すると書かれている。

ここで竹沢の人種論に共鳴するフレームワークを唱える歴史家にも触れておきたい。カレン・E・フィールズとバーバラ・J・フィールズは、その共著 *Racecraft: The Soul of Inequality in American Life* の中で、一般的に使われている「人種」の概念は三つのことを混同してしまっていると主張する。「『人種』という略記そのものが本著者の目的である。『人種』は[以下の]三つの現象、すなわち人種、人種差別、および人種魔術レイスクラフトを取り違えているのだ」³⁸。フィールズ姉妹は第一の「人種」(race)を「自然は様々に独特なグループで人類を生産して、各々のグループが生まれながらの特徴で定義され、そしてその各々のグループの特徴から、他の違う特徴で定義されたグループから不平等な階級として分別されるという概念」と定義する³⁹。この「人種」は竹沢の大文字の Race とほぼ一致

³⁸ Karen E. and Barbara J. Fields, *Racecraft: The Soul of Inequality in American in American Life*, (New York: Verso, 2012) 16. 原文では、“That very shorthand is our abiding target because it confuses three different things: race, racism, and racecraft”となっている。

³⁹ Fields, *Racecraft*, 17. 原文では、“The term race stands for the conception or the doctrine that nature produced humankind in distinct groups, each defined by inborn traits that its members share and that differentiate them from the members of other distinct groups of the same kind but of unequal rank”となっている。

している。続けて、「人種差別」(racism)は「社会的、公民的、あるいは法律的な系統に基づいた二重規範の理論と実施、それにその二重規範にまつわるイデオロギー」を指し示す⁴⁰。竹沢の人種論において、これは小文字の race の第三の特性として考えても良い。そしてフィールズ姉妹によると、「人種差別主義はまず第一に社会的な実践、すなわち人種差別的な行為とともにその行為の正当化である。人種差別は常に『人種』の客観的現実性を自明のものとして扱うのである」⁴¹。多様性を持っている人間を「人種」という生物学的に存在しないカテゴリーに無理やりにはめ込むために、いわば無意識・意識の両領域で「mental gymnastics (頭のなかでの正当化)」が行われるのである。ごく理性的な人が魔法^{ウィッチクラフト}を信じていることができるのと同じように、フィールズ姉妹は理性的な人が「人種」を信じる現象を人種魔術^{レイスクラフト}と名付ける。人種魔術はそのような現象を成立させる上での「メンタル面での領域と蔓延した信仰」を指す⁴²。竹沢の研究もこれに共鳴すると言えるのではないだろうか。フィールズ姉妹は「肌の色が黒いから黒人が隔離された」という文を簡単な例として挙げる。一見ごく普通な文に見えるが、人種魔術^{レイスクラフト}の作用により、隔離主義者の政治的な権威によって実施された「隔離」として把握されなくなり、隔離された者の特性として決定づけられてしまう。他に、「奴隷」という名詞を理解するためには人種魔術^{レイスクラフト}を信じなくてはならないと主張する。奴隷化された者がその支配者に都合よく奴隷らしいと特徴づけられること、あるいはそれを内化し従順になるのは不合理以外の何ものでもないからである。

では、人種魔術^{レイスクラフト}から蒙を啓かれると『黒地の絵』の中に何が見えるようになるのだろうか。すでに指摘したように、松本が朝鮮戦争と黒人兵の絶望的な状況に気づいたのに加えて、小倉の住民に対してほかの組織的な暴力が見えて来る。例えば、以下の節を見てみよう。

兵営^{キャンプ}の周囲は土提が築かれ、その上にとがった棘の鉄線の柵が張りめぐらされてあった。見張台からは照射灯が地上に光を当てていた。しかし、これはふだんから兵士の脱出をさまたげなかった。というのは、土提のところは、排水孔の土管がはめこんであり、兵営の庭から道路脇の溝に通じていたのだ。土管は、大きな図体の人間が一人はって行くに十分な直径をもっていた。兵士たちは、夕方からこの土管を通過して外出し、一夜を女のところで過ごし、早朝に土管から帰営するのであった。幸いなことに、土管の出入口は照射灯の光の届かない暗部にあったから、行動は自由であった。日本の旧軍隊の過酷なまでに厳しい内務規律を経験した者には、すぐ

⁴⁰ 同上。原文では、“Racism refers to the theory and the practice of applying a social, civic, or legal double standard based on ancestry, and to the ideology surrounding such a double standard”となっている。

⁴¹ 同上。原文では、Racism is first and foremost a social practice, which means that it is an action and a rationale for action, or both at once. Racism always takes for granted the objective reality of race”となっている。

⁴² 同上、18。原文では、“It refers instead to mental terrain and to pervasive belief”となっている。

に納得できぬことだったが、動哨のときにも銃を肩にずり上げて煙草を口にくわえ、腰かけている懶惰なアメリカ兵の姿態になれてきた目には、そのような脱柵も奇異には思えなくなった。⁴³

この引用文はレイプ場面の前に登場するが、レイプ場面の誇張的な人種描写と比較にならないのであまり読者の印象に残っていないかもしれない。だがそこには、重要な歴史的な事実がうかがえる。まず、見つからずに土管を回遊することの回数と容易さから、占領軍は兵士の脱走に対して無頓着な態度を取っていたことが想像できるだろう。占領軍の暴力行為についての報告がMPに届いたところで、松本は「MPの活動は緩慢であった」と書いていることから、MPは日本人の命を守ることを優先していなかったと読み取ることができる⁴⁴。また、兵士の回遊は主に「女のところ」に行くことを意味していることも明らかである。その上、回遊する度に銃を持っていた兵士の姿にも注目したい。MPの幹部に管理責任を負わせず、敗戦国の女性に対して性関係を求める兵士が武装しながら比較的自由に行動できていたことがこの引用部に書き込まれているのであるが、それが問題として取り上げられることはない。更に、「奴らは自動小銃も手榴弾も持っている。われわれでは手がつけられない」という引用にも目を向けたい⁴⁵。このセリフは、留吉が受けた暴力を報告（レイプには言及せず）した際の日本の警察官による返事である。日本の警察は無力な立場にあり、MPが動き出すのをただ待つことしかできなかったのだ。この場面では不平等なアメリカ占領軍と日本政府との関係も暗示されているが、この事実も兵士脱走の原因として扱われてはいない。言い換えると、様々な歴史的な事情が認識されているにもかかわらず、小倉兵士脱走事件の全ての行為の経緯および結果が人種パラダイムに沿って成立しているということに疑問を感じずにはおれない。

ここで中野好夫と平野謙の「解説」を顧みよう。現実起こった事件の「見事な作品化」という中野と、「現実題材の文学的処理」という平野は、実は両者ともに『黒地の絵』における人種パラダイムを指しているのではないだろうか。「よく分っていない」事件を把握する上で、松本は欧米の文学や言述にありふれた人種差別的比喩に頼ったことは上で論じた通りである。ここで、人種イデオロギーの再確認のみならず、女性の苦難に対する視点の欠陥についても補足しておきたい。日本と沖縄の占領史の研究者マイケル・S・モラスキーはそれについて次のように述べている。

文学は、ある時代における社会の記憶の構築と保存の両方に関わっている。これは物語的な記述へ組み込まれることによるばかりでなく、多岐に渡る言述的文脈を通して広く流布する限定的な比喩的用法を生み出すことにもよるのである。日本の男性による占領期の文学はこの考察を実証するものである。なぜならば当時の男性作家による多くの作品には、互いの共通点はわずかであるにも関わらず、よくありがちな言葉の綾・物語的な戦略が頻用されているのである。こうした男性作家は概して言語的・性的な服従のメタファーに頼り、それらの表現を国民国家への屈辱と

⁴³ 松本「黒地の絵」, 312-3.

⁴⁴ 松本「黒地の絵」, 340.

⁴⁵ 松本「黒地の絵」, 334.

いう曖昧なメタファーとして融合してしまうのである⁴⁶。

これはかなり説得力のある論拠である。先に大江健三郎の『飼育』を例として挙げたように、『黒地の絵』に見られる黒人に対する人種的な表現（「よくありがちな言葉の綾・物語的な戦略」）は、作家の視点を問わず数え切れないほどの作品にも見られる。それに、政治的見解や性格を問わず、占領期文学では多くの男性作家が女性に対する性的暴力を「国民国家的な屈辱」という象徴として扱うことが多い。また、「日本人の男性作家は…個々のレイプや売春の例を外国支配下における国民全体の運命へと早々と関連させ」てきたのである⁴⁷。『黒地の絵』に関して、この事件の最大の被害者前野芳子が松本に重要視されていないことからモラスキーのポイントを確認できる。実際、レイプが起こった後、留吉が妻芳子と無理やりにセックスをしようとするところで、語り手は「こんな行為で妻の屈辱に同化しようというのか」と同情を寄せている⁴⁸。芳子の屈辱と留吉が「同化」することで、芳子の代わりに、留吉が被害者になることができるのだ。また同時に加害者に対して仇を討つ権利を持つ英雄になることができるのである。このようにして、芳子のレイプがこの作品の軸であるのにもかかわらず芳子は叫び以外に「声」を持つこともなく、『黒地の絵』の後半には完全に物語から脱落するのである。モラスキーが主張するように女性の「被害者としての象徴的な価値以外に[特に男性作家の作品において]女の登場人物に対して興味がなかった」ことを確認しておきたい⁴⁹。松本の場合においても、また松本の解説者においても、芳子の役割が重要視されていない。そしてこれは今日においても考え続けるべき重要な点である。日本人の女性が米軍基地や施設の近隣地域で受ける実際の性的被害は、現在でも日本と米国との関係の象徴へと還元されているかどうか否かは、読者の判断に委ねたい。

「黒人」という言葉を使うこと自体が「人種」というイデオロギーに従うことである。現在でも多くの人があるイデオロギーから離れることができないように、松本清張も人種

⁴⁶ Michael S. Molasky, *The American Occupation of Japan and Okinawa: Literature and Memory*, (New York: Routledge, 1999), 2. 原文では、“literature participates in both the construction and preservation of a society’s memory of an era. This is accomplished not only by compiling narrative accounts but also by generating a finite set of tropes that will circulate through a wide range of discursive contexts. Japanese men’s writing on the occupation confirms this observation, for a predictable group of rhetorical figures and narrative strategies appears in works by otherwise dissimilar writers...These male writers typically rely on metaphors of linguistic and sexual subordination, fusing them into ambivalent allegories of national humiliation”となっている。

⁴⁷ Molasky, *The American Occupation of Japan and Okinawa*, 11. 原文では、“Japanese males...were especially quick to link individual instances of rape and prostitution to the fate of the entire nation under foreign rule”となっている。

⁴⁸ 松本「黒地の絵」, 338.

⁴⁹ *Ibid.*, 89. 原文では、“[these works are] uninterested in their female characters except for their potential symbolic value as victims”となっている。

パラダイムを通じて小倉の日本人が受けた被害を語った。松本は鋭い問題意識を提示しながら様々な朝鮮戦争に関する事実と人種差別を捉えることができた。それでも、結局は松本も「人種」の魔法から離れることができなかったのである。

参考文献

——原典

松本清張「黒地の絵」1958年、『朝鮮戦争：コレクション戦争と文学 第1巻』浅田次郎等編，306-368，東京：集英社，2012年。

——史料

- 「年譜」『新潮社日本文学 50 松本清張集』東京：新潮社，1970年。
- 藤目ゆき「第2章 占領軍の犯罪—交通犯罪・暴行・傷害・殺人事件」特殊講義，占領軍被害の研究，京都大学，2017年6月13日。
- 松本清張「あとがき」『松本清張全集 37 装飾評伝』東京：文藝春秋，1973年。
- 平野謙「解説」『黒地の絵 傑作短編集 2』東京：新潮文庫，1965年。
- 中野好夫「解説—松本清張さんとのこと」『松本清張全集 37 装飾評伝』東京：文藝春秋，1973年。
- 竹沢泰子 編『人種の表象と社会的リアリティ』東京：岩波書店，2009年。
- Bowers, William T., William M. Hammond, and George L. MacGarrigle. *Black Soldier, White Army: the 24th Infantry Regiment in Korea*. Washington, D.C.: United States Army Center of Military History, 1996.
- Dower, John W. *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*. New York: W.W. Norton & Co, 1999.
- Fields, Karen E. and Barbara J. *Racecraft: The Soul of Inequality in American in American Life*. New York: Verso, 2012.
- Molasky, Michael S. *The American Occupation of Japan and Okinawa: Literature and Memory*. New York: Routledge, 1999.
- Morris-Suzuki, Tessa. “Lavish are the Dead: Re-envisioning Japan’s Korean War.” *The Asia-Pacific*

Journal 11 (2013): 1-19.

Okada, Yasuhiro. "'Cold War Black Orientalism': Race, Gender, and African American Representations of Japanese Women during the Early 1950s." *The Journal of American and Canadian Studies* 27 (2009): 45-79.

---. "Race, Masculinity, and Military Occupation: African American Soldiers' Encounters with the Japanese at Camp Gifu, 1947-1951." *The Journal of African American History* 96 (2011): 179-203.

"Seicho Matsumoto." In *Contemporary Authors Online*. Detroit, MI: Gale, 2017. *Gale In Context: Biography* (accessed November 27, 2019).